

「デミアン II」

——デミアンと彼の死——

高 橋 陽 一

(帯広畜産大学独語研究室)

1979年8月31日受理

「Demian II」

—Demian und sein Tod—

Von

Youichi TAKAHASHI

デミアンなる人物に対し、ヘルマン・ヘッセは、1931年12月に、当時チューリヒにいたF.アーベルにあてた書簡の中で、次のように言っている。

「詩はそれがほんとうに詩であるところでのみ、すなわちそれが象徴を作るところでのみ、生きて作用するのです。デミアンとその母とは象徴だ、と私は思います。ということはこの二人は合理的な観察がおよび得るよりはるかに多くを包括し、意味するのです。彼らは、魔術的な願望の姿なのです。」¹⁾

確かにこの小説の前半においては、「外見よりは年長らしく、紳士のように、異様にできあがった」、その上読心術を心得ており、どんなことでも先生とは違った見方のできる少年が、実際に血のかよった人間として実在するとしても決して不思議ではなからう。またそれが読者の興味をよりそるための誇張とも考えられよう。しかし小説が後半に入ると“Traum” “bewußtlos” “Pantasia”等の言葉が頻りに使用されることでもわかるように、ストーリーそのものが現実性の薄いものとなってくる。主人公シンクレールを取り巻く人物、ならびに様々なでき事も、彼の内界において起っているものなのか、外界におけるものなのかの区別すら困難となっていく、ついには主人公にとって、彼の外界は総て否定されているのではないかとさえ思えてくる。したがってヘッセの「魔術的」という言葉を、いわゆる内面世界と解釈して、デミアンと彼の死について考えてみたい。

さてヘッセは、彼自身「魔術的願望の姿」と言うデミアンに何を託したのであろうか。まず本文中からデミアンが主人公シンクレールの内界（無意識）の象徴であることを示すであろ

う、いくつかの文章を取り上げてみることにする。なぜならそれによりデミアンなる人物のこの小説における役割が、より明確なものとなると考えるからである。

まずデミアンの顔についての表現についてである。

Es war, als sei auch etwas von einem Frauengesicht darin, und namentlich schien dies Gesicht mir, für einen Augenblick, nicht männlich oder kindlich, nicht alt oder jung, sondern irgendwie tausendjährig, irgendwie zeitlos, von anderen Zeitläuften gestempelt, als wir sie leben²⁾.

Denn ich sah in seinem Blick wieder diese saltsame, tierhafte Zeitlosigkeit, dies unausdenkliche Alter³⁾.

Der Anblick machte mich zittern. Er ist tot! dachte ich, beinahe sagte ich es laut. Aber ich wußte, daß er nicht tot sei. Ich hing mit gebanntem Blick an seinem Gesicht, an dieser blassen, steinernen Maske, und ich fühlte: das war Demian! Wie er sonst war, wenn er mit mir ging und sprach, das war nur ein halber Demian, einer, der zeitweilig eine Rolle spielte, sich anbequemte, aus Gefälligkeit, mittat. Der wirkliche Demian aber sah so aus, so wie dieser, so steinern, uralt, tierhaft, steinhart, schön und kalt, tot und heimlich voll von unerhörtem Leben⁴⁾.

これは3章「罪人、までに見られるデミアンの顔に対する表現であるが、ここに見られる「女の顔のある要素さえ含んだ」、「動物的な時間の超越と、想像もつかない年齢」を感じさせた顔は、4章において、シンクレールが描いた愛する少女ベアトリーチェの顔と二重写しとなり現れる。

Als ich vor dem fertigen Blatte saß, machte es mir einen seltsamen Eindruck. Es schien mir eine Art von Götterbild oder heiliger Maske zu sein, halb männlich, halb weiblich, ohne alter, ebenso willensstark wie träumerisch, ebenso starr wie heimlich lebendig. Eies Gesicht hatte mir etwas zu sagen, es gehörte zu mir, es stellt Forderungen an mich. Und es hatte Ähnlichkeit mit irgend jemand, ich wußte nicht mit wem⁵⁾.

ここでシンクレールは、この二重写しとなった顔の正体に気付く。

「それはデミアンの顔だった。後に私はしげしげとその絵を、記憶の中に見い出したデミアンのほんとうの表情と比較した、似てはいたが全く同じではなかった。しかし、やはりそれはデミアンだった。」

ベアトリーチェの奇妙な顔の正体が、結局はデミアンのそれであったことに気付くと、さらに顔に対する印象は明確なものとなっていく、やがて一つの解答が与えられる。

デミアン、ベアトリーチェと変化した、この顔がシンクレール自身の内面の顔ではないかと彼は考えはじめる。自分自身には似てはいないが、それは「私の生命をなしているもの」、「私の心」、「私の運命」、「私の精霊」ではないかとシンクレールは言う。

Lange saß ich ihm gegenüber, auch als es schon erloschen war. Und allmählich kam mir ein Gefühl, daß das nicht Beatrice und nicht Demian sei, sondern ich selbst. Das Bild glich mir nicht—das sollte es auch nicht, fühlte ich—aber es war das, was mein Leben ausmachte, es war mein Inneres, mein Schicksal oder mein Dämon. So würde mein Freund aussehen, wenn ich je wieder einen fände. So würde meine Geliebte aussehen, wenn ich je eine bekäme. So würde mein Leben und so mein Tod sein, dies war der Klang und Rhythmus meines Schicksals⁹⁷.

そして繰り返しやってくる空想の戯れにより、それは幻像となり、やがてシンクレール内面的な幻像と、彼の求める神についての外部からのさまざまな暗示との間に、徐々に連絡ができてあがっていくにしたがって、それは天使と悪魔、男と女を一身に兼ね、人と獣であり、最高の善と極悪と変化していく。

Das Bild der Traumgeliebten sah ich oft mit überlebendiger Deutlichkeit vor mir, viel deutlicher als meine eigene Hand, sprach mit ihm, weinte vor ihm, fluchte ihm. Ich nannte es Mutter und kniete vor ihm in Tränen, ich nannte es Geliebte und ahnte seinen reifen, alles erfüllenden Kuß, ich nannte es Teufel und Hure, Vampyr und Mörder. Es verlockte mich zu zartesten Liebesträumen und zu wüsten Schamlosigkeiten, nichts war ihm zu gut und köstlich, nichts zu schlecht und niedrig⁹⁸.

やがてシンクレールは、自分が求めてきたものがデミアンの母、エヴァ夫人の中にあることに気づいた。

Das war mein Traumbild! Das war sie, die große, fast männliche Frauenfigur, ihrem Sohne ähnlich, mit Zügen von Mütterlichkeit, Zügen von Strenge, Zügen von tiefer Leidenschaft, schön und verlockend, schön und unnahbar, Dämon und Mutter, Schicksal und Geliebte. Das war sie!⁹⁹.

そこにシンクレールが見たものは、「魔精と同時に母」であり、「運命と同時に愛人」であり、また「万物の母」(die Mutter aller Wesen)¹⁰⁰であった。そして彼が求めてきた幻像がエヴァ夫人からの暗示であったことを知り¹⁰¹、やがてひきつけられて目ざす対象としてきたものが、エヴァ夫人その人ではなくて、彼女はシンクレールの内心の象徴であるに過ぎず、自分をより深く内部に導こうとしているものであったと、はっきり感じるようになる。

Meine Liebe zu Frau Eva schien mir der einzige Inhalt meines Lebens zu sein. Aber jeden Tag sah sie anders aus. Manchmal glaubte ich bestimmt zu fühlen, daß es nicht ihre Person sei, nach der mein Wesen hingezogen strebte, sondern sie sei nur ein Sinnbild meines Innern und wolle mich nur tiefer in mich selbst hinein führen. Oft hörte ich Worte von ihr, die mir klangen wie Antworten meines Unterbewußten auf brennende Fragen, die mich bewegten. Dann wieder gab es Augenblicke, in denen ich neben ihr vor sinnlichem Verlangen brannte und

Gegenstände küßte, die sie berührt hatte. Und allmählich schoben sich sinnliche und unsinnliche Liebe, Wirklichkeit und Symbol übereinander¹⁸⁾.

デミアンに始まり、ペアトリーチェ、エヴァ夫人と変化してきた、この一連の顔にまつわる幻像の正体は、「大いなる母」であり、そしてそれはシンクレール自身の内なるものでもあったことが、これで理解できよう。そして先の引用文で見た様々な表現が、いわゆるユングの元型としての諸相であることは、先の小論で触れておいたが、「魔精と同時に母」、「運命と同時に愛人」という言葉の裏に、まさに母親元型の相が潜んでいることがわかるであろう。デミアンも、エヴァ夫人も結局のところ、シンクレールの内面にある、母親元型の象徴化されたものであり、それとの和解を求めて流離う姿は、言い換えればシンクレール自身の内面世界における、父なるもの（精神）と、母なるもの（本能的なるもの、いわゆる自然）との対立であったと言える。このディオニソス的なものとアポロ的なものの対立が、この小説の根本命題となっているわけであるが、このことについて先に進む前に、デミアンについてももう少し考えてみたい。

シンクレールは、デミアンに会う以前から、すでに明・暗、善・悪、つまり明るく肯定された世界（父なる精神の世界）と、暗く黙殺された本能の世界（母なる自然の世界）との対立に気づいていた。そして両親の明るい世界では、黙殺されねばならない、別の世界にむしろ憧れを懐いていたが、それは決してかなえられない願望として、心の中で抑圧されていたことを思い出してみる必要がある。抑圧されたものは、シンクレールのコンプレックスとして、長い間心の中にやどっていたのであり、それに対しデミアンが、シンクレールの明るい世界での、いい換えれば意識生活において必然的に生じるであろう一面性に対し、補償的な役割を常に演じ、母なるものとの和解をめざし、彼に方向性を与えていたと言える。カインとアベルの話、二人の罪人の話に対し、別な解釈を教示することにより、シンクレールが心の中にやどしながら、自分一人の力ではどうしても是認できなかった、暗い本能の世界を、デミアンは見事肯定している。

ヘッセ自身はデミアンを「魔術的願望の姿」であると言った。またフーゴー・バルは「Traumbilber」¹⁹⁾と表現している。おそらくそれらは理想自我を意味するものであろうが、先にデミアンにまつわる顔の描写からわかったように、それらの表現の裏に母親元型の象徴が考えられよう。いずれにしても、シンクレールの「願望」あるいは「理想」の姿としてのデミアンと、シンクレールのコンプレックス（母親元型）は表裏一体をなすもので、相対的關係が成り立つわけであるから、デミアンをシンクレールのコンプレックスの象徴化されたものと言い換えた方が理解しやすいように思える。なぜなら次に引用する文章における、デミアンの死を、シンクレールのコンプレックスの自我への統合と考えたいからである。

“Kleiner Sinclair, paß auf! Ich werde fortgehen müssen. Du wirst mich

vielleicht einmal wieder brauchen, gegen den Kromer oder sonst. Wenn du mich dann rufst, dann rufst, dann komme ich nicht mehr so grob auf einem Pferd geritten oder mit der Eisenbahn. Du mußt dann in dich hinein hören, dann merkst du, daß ich in dir drinnen bin. Verstehst du? Und noch etwas! Frau Eva hat gesagt, wenn es dir einmal schlecht gehe, dann solle ich dir den Kuß von ihr geben, den sie mir mitgegeben hat...Mach die Augen zu, Sinclair!"¹⁴⁾.

Aber wenn ich manchmal den Schlüssel finde und ganz in mich selbst hinuntersteige, da wo im dunkeln Spiegel die Schicksalsbilder schlummern, dann brauche ich mich nur über den schwarzen Spiegel zu neigen und sehe mein eigenes Bild, das nun ganz Ihm gleicht, Ihm, meinem Freund und Führer¹⁵⁾.

ところで、先に引用した、F. アーベルへの書簡の中で、ヘッセは小説デミアン以後の作風の変化について次のように述べている。

Sie haben recht, wenn Sie in meinen Schriften vom "Demian" an eine neue Note spüren, sie beginnt in einigen der "Märchen" schon vorher. Für mich selbst war damals der Einschnitt ein starkes Erlebnis¹⁶⁾.

ここでヘッセの言う「自己切開」とは、おそらく先に述べた、いわゆるこの小説の根本命題である、二つの世界の対立に対するものであろう。そしてそれは母なるもの、つまり自然であり、無意識であり、この小説においてはデミアンとエヴァ夫人に象徴された世界と、父なる明るい世界、つまり精神であり意識の世界の対立であったことを見てきた。しかしこの対立は決して小説デミアン以後においてのみ見られる、ヘッセ文学の根本命題ではなくして、初期の数々の作品の中にもみられるものであった。だがこの問題の本質を根本まで掘り下げる動機となったものは、ヘッセ自身が言うように¹⁷⁾、第1次世界大戦におけるヨーロッパの惨状を目のあたりにしたことによるものであろう。

1917年に書かれた「たましい」という短編に次のような文が見られる。

Ich sah den Menschen so von der Bahn der Seele abgelenkt, so von Wollen beherrscht, so roh und wild hinter tierischen, äffischen, urweltlichen Zielen her, so auf Tand und Schund erpicht, daß mich vorübergehend der schlimme Irrtum beherrschen konnte, vielleicht sei der Mensch, als Weg zur Seele, schon verworfen und im Rückgange begriffen, als müsse anderswo aus der Natur diese Quelle sich ihren Weg suchen¹⁸⁾.

Sie haben ihre Seele verloren in der Welt des Geldes, der Maschinen, des Mißtrauens. Sie sollen sie wiederfinden, und sie werder krank werden und leiden, wenn sie die Aufgabe versäumen¹⁹⁾.

Von hier aus betrachtet, sieht Europa aus wie ein Schläfer, der in Angstträumen um sich haut und sich selber verletzt²⁰⁾.

ここに見られるように、ヘッセはヨーロッパ全土を覆ったあの狂気と野蛮さの中に、「金

銭・機械・不信の世界においてたましいを失った」人間を見、精神の荒廃を痛感した。

「人間は動物性にみちている、原始性にみちている、獣的な残酷な利己心の巨大な矯めようもない衝動にみちているのである。すべてこれらの危険な衝動は存在しているのである、つねに存在しているのである、しかし文化、相互の協定、文明がそれをつつみかくしたのである。それらの衝動は外に現わされない、だれも子供のときからそれらの衝動をかくしおさえることを学んだのである。しかしすべてこれらの衝動はいつか一度は表面に現われるものである。どの衝動も生存をつづけており、殺すことはできない、どれも、長期にわたり永久にわたっては矯めたり、馴れたりしておくことはできないのだ。」²¹⁾とヘッセが言うように、ヨーロッパを襲った大きな破壊力が、人間のもつ動物性、原始性、獣的な残酷な利己心によるものであり、いわゆる女性的なるもの、本能的なる人類共通の普遍的無意識に由来するものであることを悟った²²⁾。

1914年9月、ヘッセは「なお、友よ、そのような調子をやめよう！」という短文で、「ドイツに脈々と流れる最高の思想家、詩人の精神が包含する正義、節度、礼儀、人間愛の回復を切々と訴えもした²³⁾。しかしヨーロッパ全土を覆った狂気が、自分自身の中にも存在し、常に悩みとしてきたことを知った時、その責任を自分の外に求めるのではなく、自身の内部にあるとした。そして自己の内部をすべてさらけ出すことにより、その責任の一端をになうべきだと考えたのであろう。

「今度はしかし、自省しないわけにはいかなかった。しばらくして私は、自分の苦しみの責任を、自分の外にはなく、自分の内に求めざるを得ないでいる自分に気がついた。というのは、私に、全世界の狂気と野蛮とを非難する権利は、人間にも神にもない、いわんや私になんぞないことを、よく悟ってからである。したがって、私がこういうふうに全世界の流れと衝突したとすると、それは私自身のうちにいろいろな無秩序があるに違いないからであった。そして果して、大きな無秩序があった。自分自身のうちにおいてこの無秩序をつかまえ、その整理を試みることは、愉快的ことではなかった。」²⁴⁾とヘッセは自伝の中で語っている。ここで言う「無秩序の整理」と、先に引用した「自己切開」とは、「デミアン I」で触れた、当時のノイローゼ状態の原因究明である、ラング氏による、前後60数回に及ぶ精神分析の治療をさすものであろう²⁵⁾。

「自己切開」というすさまじい表現でわかるようにラング氏との対話は、ヘッセにとって血みどろの戦いであったと考えられる²⁶⁾。そしてそこに彼が学んだものは、彼を悩まし続けてきた「大なる無秩序」が、いわゆる男性原理のもとで抑圧されてきた、女性原理によるものであり、同時にヨーロッパの当時の惨状の原因も、結局のところヘッセ自身の内的葛藤と同じものであるとの確証を得た。小説デミアンにおいて、自己のもつ女性的なるものを総てさらけ出し、その持つ破壊力をも含めた、大なる力を決して抑圧することなく、総てを是認し、

男性原理のもとに、和解、統合することにより、はじめて女性原理のもつ力が、人格形成の糸口となり、推進力となり得ることを示したと言えよう。

ヘッセは1919年に書かれた「カラマーゾフ兄弟」、「ヨーロッパの没落」と題する短編の中で、「私がこの書物にたいして表明する思想や思いつきがすべて、ドストエフスキー自身のところに意識されていたと前提しているわけではない。まさにその反対である。」²⁷⁾として、自身の中にある母なるものを「原衝動」(Urtrieb)、または「動物」(Tier)と呼び、それを殺すことは自身の死を意味するであろうことと、それを多少ともうまくみちびき、やわらげ、善に奉仕せしめることができるのであると言っている²⁸⁾ことは、まさに上述したことを裏付けるものであろう。

「人間の負う役割と任務はとくに、たましいを表すことである。」²⁹⁾という言葉が示すように、まさにそこにヨーロッパ救済の道を求めようとしたと言える。

しかるに女性原理の象徴としてのデミアンの死は、いわゆる死ではなく、主人公シンクレールへの、大いなる力としての統合であり、再生を意味し、その時はじめて彼が「めざめたる者」として十全に生き得ることを意味していよう。

「詩はそれがほんとうに詩であるところでのみ、すなわちそれが象徴を作るところでのみ、生きて作用するのです。」というヘッセの言葉が示すように、小説デミアンにおいて、ヘッセは自己の内的葛藤と第1次世界大戦という、二つの戦いのイメージを重ねると同時に、デミアンの死とシンクレールの再生の姿の中に、詩人としてのヘッセ自身の再生と、ヨーロッパの再生の姿を見事に象徴化したものと言えよう。

注

- 1) Die Dichtung aber kann sich anstrengen, soviel sie mag, um etwaige Meinungen durchzusetzen, sie vermag es nicht, sondern sie lebt und wirkt nur da, wo sie wirklich Dichtung ist, das heißt wo sie Symbole schafft. Der Demian und seine Mutter sind, so glaube ich, Symbole, das heißt sie umschließen und bedeuten weit mehr, als der rationalen Betrachtung zugänglich ist, sie sind magische Beschwörungen. G. S. VII S. 515.
- 2) G. S. III S. 146.
- 3) G. S. III S. 157.
- 4) G. S. III S. 161.
- 5) G. S. III S. 176.
- 6) G. S. III S. 177-178.
- 7) G. S. III S. 178.
- 8) G. S. III S. 190.
- 9) G. S. III S. 223-224.
- 10) G. S. III S. 239.
- 11) G. S. III S. 240.
- 12) G. S. III S. 242.
- 13) Hugo Ball S. 142.

また 1918 年に書かれた短編、「日記から」の中に次のような文が見られる。「そして私はまたひとつの体験をした。それは夢に似て夢ではなかった、思想に似て思想でなかった、幻想に似たものであり、意識の光波でさっと無意識界を照らしたようなものであった。私の最後の半睡において、私の体験したものはひとりの「聖者」である。ひとつには、私自身が聖者であって、彼の考えを考え、彼の感じを感じているように思えた。しかし、またひとつにはこうも思えた、私は彼を別人として、私と離れたものとして見ている。しかし私は彼をすっかり洞察しており、一身体のように彼のことを知っているのだと。彼の姿を自分の眼で見ているようでもあるし、また人から彼のうわさを聞き、本で彼の伝記を読んでいるようでもあった。私が私自身にこの聖者のことを話しているようでもあったが、同時に、彼が私に彼自身のことについて物語っているようにも、あるいは彼が私に先立ち私の範例となって生活していて、それを私が、私自身の生活のように感ずるのであるとも思えた。」ここに言う「聖者」、「私に先立つ私の範例」が直接デミアンをさすものではないにしても、それはヘッセ自身の言う「魔術的願望の姿」と同じ意味で言われていると考えられよう。またバルの言う「Traumbilder」もここで言う、「私に先だつ私の範例」と言う言葉と同じものと考えてもよいのではないか。

14) G. S. III S. 256.

15) G. S. III S. 257.

16) G. S. VII S. 514.

17) G. S. VII S. 514.

Er hängt mit dem Weltkrieg zusammen. Ich war bis zum Kriege zwar ein Einsiedler gewesen, aber mit Vaterland, Regierung, öffentlicher Meinung, offizieller Wissenschaft etc. nicht in Konflikt gekommen, obwohl ich demokratisch empfand und mich gern an der Opposition gegen Kaiser und Wilhelminismus beteiligte.

18) G. S. VII S. 70.

19) G. S. VII S. 72.

20) G. S. VII S. 77.

21) G. S. VII S. 170.

22) もちろんこの普遍的無意識という、ユング流の発想法は、本小説中においてはピストリウスの次の言葉の中に見られる。

“Wir ziehen die Grenzen unserer Persönlichkeit immer viel zu eng! Wir rechnen zu unserer Person immer bloß das, was wir als individuell unterschieden, als abweichend erkennen. Wir bestehene aber aus dem ganzen Bestand der Welt, jeder von uns, und ebenso wie unser Körper die Stammtafeln der Entwicklung bis zum Fisch und noch viel weiter zurück in sich trägt, so haben wir in der Seele alles, was je in Menschenseelen gelebt hat. Alle Götter und Teufel, die je gewesen sind, sei es bei Griechen und Chinesen oder bei Zulukaffern, alle sind mit in uns, sind da, als Möglichkeiten, als Wünsche, als Auswege. Wenn die Menschheit ausstürbe bis auf ein einziges halbwegs begabtes Kind, das keinerlei Unterricht genossen hat, so würde dieses Kind den ganzen Gang der Dinge wiederfinden, es würde Götter, Dämonen, Paradiese, Gebote und Verbote, Alte und Neue Testamente, alles würd es wieder produzieren können”. G. S. III S. 199.

“Es ist ein großer Unterschied, ob Sie bloß die Welt in sich tragen, oder ob Sie das auch wissen! Ein Wahnsinniger kann Gedanken hervorbringen, die an Plato erinnern, und ein kleiner formmer Schulknabe in einem Herrnhuter Institut denkt tiefe mythologische Zusammenhänge schöpferisch nach, die bei den Gnostikern oder bei Zoroaster vorkommen. Aber er weiß nichts davon! Er ist ein Baum oder Stein, bestenfalls ein Tier, solange er es nicht weiß. Dann aber, wenn der erste Funke dieser Erkenntnis dämmert, dann wird er Mensch. Sie werden doch wohl nicht alle die Zweibeiner, die da auf der Straße laufen, für Menschen halten, bloß weil sie aufrecht gehen und ihre Jungen neun Monate tragen? Sie sehen doch, wie viele von ihnen Fische oder Schafe, Würmer oder Egel. G. S. III S. 200.

23) G. S. VII S. 44.

34) G. S. IV S. 278.

Diesmal aber blieb mir die Einkehr nicht erspart. Es dauerte nicht lange, so sah ich mich genötigt, die Schuld an meinen Leiden nicht außer mir, sondern in mir selbst zu suchen. Denn das sah ich wohl ein: der ganzen Welt Wahnsinn und Roheit vorzuwerfen, dazu hatte kein Mensch und kein Gott ein Recht, ich am wenigsten. Es mußte also in mir selbst allerlei Unordnung sein, wenn sich so mit dem genzen Weltlauf in Konflikt kam. Und siehe, es war in der Tat eine große Unordnung da. Es war kein Vergnügen, diese Unordnung in mir selber auszupacken und ihre Ordnung zu versuchen.

25) Hugo Ball S. 141-142.

26) Franz Baumer S. 46.

F. Baumer もヘッセと精神分析との出会いを「無意識との痛烈な出会い」であったとし、1934年にヘッセが、C. G. ヨング博士にあてた書簡の中から、次の文を引用して、分析治療の危険性を指摘している。Eben darum ist ja die Psychoanalyse für Künstler so sehr schwierig und gefährlich, weil sie dem, der es ernst nimmt, leicht das ganze Künstlertum zeit lebens verbieten kann. Geschieht das bei einem Dilettanten, dann ist es gut-geschähe es bei einem Händel oder Bach, so wäre es mir lieber, es gäbe gar keine Analyse und wir behielten dafür den Bach.

27) G. S. VII S. 172.

28) G. S. VII S. 171.

Denn so steht es mit jeder Kultur: Töten können wir die Urtriebe, das Tier in uns, nicht, denn mit ihnen stürben wir selbst- aber wir können sie einigermaßen lenken, einigermaßen beruhigen, einigermaßen dem "Guten" dienstbar machen, wie man einen bösen Gaul vor einen guten Wagen spannt.

29) G. S. III S. 69.

参 考 文 献

Hermann Hesse Gesammelte Schriften, Suhrkamp 1968 Bd 3. 4. 7.

Hugo Ball, Hermann Hesse, Sein Leelen und sein Werk, Bibliothek Suhrkamp 1967 Bd 34.

Franz Baumer Hermann Hesse, Colloquium Verlag. Berlin 1968.

ヘッセ研究, 秋山六郎兵衛., 三笠書房

ヘッセ研究, 高橋健二, 新潮社.

ユング心理学入門, フリーダ・フォーダム, 国文社.

無意識の心理, C. G. ヨング, 人文書院.

ユング心理学, J. ヤコビー, 日本教文社.

コンプレックス, 河合隼雄, 岩波新書.

エビステメーテ, 朝日出版, 1977. 5.

現代思想 4, 1979, 青土社.

現代ドイツ文学, 1969, 有信堂.

